

「言語表現技術」における保育教材製作を通じた 学びの広がり

近 藤 千 草*

Learning Through the Make of Childcare Teaching Materials in the Course “Methods of Expression Through Language”

Chigusa KONDO

要 旨

本稿の目的は、科目「言語表現技術」（1年次・前期）において学生個々が製作した保育教材を授業内で発表したことによる気づきと学びの実態を明らかにし、表現技術の向上に向けた指導法への示唆を得ることである。学生は本授業の中で、保育実践として用いられる教材、ペープサート、パネルシアター、エプロンシアターより一作品の製作を行った。教材の完成後、クラス内で発表会を実施し、見る側の学生はワークシートに感想を記入した。ワークシートの記入内容を分析した結果、学生は、①発表力（表現力・言葉・演出等）、②製作物（仕掛け、精密さ等）、③子どもの目線（好きなテーマ、子どもの学び等）、④保育者の視点（保育の意図、問いかけ等）、⑤対応のあり方（臨機応変な対応）、⑥アイディアの提示、⑦自身の課題の明示、⑧一見学者の立場としての感想を示していた。ワークシートへの記入内容は、発表回を重ねるごとに詳細になり、他者の課題点をアドバイスする姿勢が生み出されていった。学生自らが製作した教材を発表するという体験は、気づきを広め、省察を深める構造となっていた。初年次における本体験は、次年次以降における専門学習の基礎として、また、現場実習での実践へつながるものであることが示唆された。今後は、保育の場面状況に応じて柔軟に表現・対応できるよう、理論と実践とを螺旋的に組み込んでいくことが課題となった。

キーワード：言語、表現技術、保育教材、保育実践、体験型学習

*准教授 教育学

1. はじめに

本学幼児教育学科では、初年次専門科目として「言語表現技術」（前期・2単位）を位置づけている。本科目は、保育士養成課程等検討会（平成22年）において保育士養成課程の改正がなされる中で、従来の「基礎技能」から保育における「表現」に係る保育技術を広く捉えて子どもの経験や保育の環境を様々な表現活動に結び付け、遊びを豊かに展開するために必要な技術を習得する科目として新設された「保育表現技術」に値する。保育実践において豊かな「言語力」が求められる今日、いかに伝えるかを考察できる保育者を養成していくことが課題である。そこで、本科目では、言語の構造や言語形成に関わる発達論等の基礎理解をもとに保育教材の製作を行い、授業内での発表を経て、最終的には本学附属保育園における夏期の体験実習において実践することを目標に授業に取り組んだ。授業シラバスは表1の通りである。

本科目の受講生は初年次学生であり、保育教材にはどのような種類があり、どのように演じるものなのか、教材は子どもに対しどのような影響をもたらすものであるか理解していない状況下にある。そこで、保育の場で日常的に用いられるペープサート、パネルシアター、エプロンシアターに関する概要説明とその実際を紹介し、上級生ボランティアによる実演（実習等で実践したもの）を見た上で、製作したい教材を選ぶ行程を取った。製作後は、授業内において一人ひとりが発表を行った。本学には大学に隣接して附属保育園があり、夏期休暇を利用して一人につき2日間の体験実習を行っている。その実習において授業で製作した保育教材を実演させて頂き、実際に子どもと触れ合う中で表現することを体験させた。本稿では、平成25年度学生を対象とし、授業内で行った教材発表の中で、学生は保育教材を用いて表現することに対してどのような観点に気づき、何を学びとしているかを明らかにしたい。発表は3回に分けて行い、見る側の学生は、発表者一人ひとりに対する感想をまとめた。学生が記入した文字記録を意味内容ごとに分類し、各回ごとの気づきと学びの傾向を明らかにすると共に、発表回数を

表1 平成25年度「言語表現技術」シラバス

1回目	言葉について（構造や発達過程）	6回目	上級生による実演②	11回目	製作活動④
2回目	絵本・紙芝居の概要と実践	7回目	教材の立案・計画	12回目	発表リハーサル
3回目	ペープサートの概要と実践	8回目	製作活動①	13回目	発表会①
4回目	パネルシアター・エプロンシアターの概要と実践	9回目	製作活動②	14回目	発表会②
5回目	上級生による実演①	10回目	製作活動③	15回目	発表会③と総まとめ

「言語表現技術」における保育教材製作を通じた学びの広がり

経て学びの様相に変化が見られるのか分析する。分析結果より、学生が保育教材を用いた表現に対する認識を深め広げるための指導方法への示唆を得たいと考える。

2. 上級生による保育教材実演と初年次生の気づき

平成 25 年度は、4 年生の有志により、ペープサート 6 作品（6 名）、パネルシアター 5 作品（5 名）、エプロンシアター 6 作品（6 名）の実演を行った。1 年生はグループに分かれ、実演を見てワークシートに感想を書き込む作業を行った。実演の様子は下記の通りである。

①ペープサート実演の様子

両サイドを割り箸で留めた用紙にクイズの解答を絵で描き、一枚ずつめくりながら回答を表示するペープサート（写真 1）、用紙の両面に異なった絵を描き、両手でくるくると割り箸を回すと絵が一体化し、絵が浮き上がるペープサート（写真 2）、舞台を作り物語りを演じていくペープサート（写真 3）などが紹介された。



写真 1 「クイズ形式の作品」



写真 2 「回すと形が浮き上がる作品」



写真 3 「舞台のある作品」

②パネルシアター実演の様子

クイズ形式で進められるもの、ストーリーのあるもの、歌と共に展開されるもの、食育をテーマにしたもの、子どもに人気のキャラクターが登場するものなどの紹介があり、発達や年齢、季節などによって取り上げる内容を選別していく必要性も述べられた。実演後には、製作過程、製作に費やした時間、塗り方のコツや演じるときのポイントなどが語られた。1 年生は実際に作品を手にとって教材の特質を確認した。



写真4 「手振り身振りを伴う実演」



写真5 「上演後の製作過程の説明」



写真6 「パネルを貼っていく」

③エプロンシアター実演の様子

演者が自由に動くことのできるエプロンシアターは、立ったり、座ったり、中腰で演じたりと様々な方法論が提示された。また、作品をエプロンから取り外したり、実際に動く動作や食べたり飲み込んだりする動作、伸びたり縮んだり隠れたりと多様な動きを伴うエプロンシアターならではの特質も表現した。



写真7 「取り外して演じる」



写真8 「学生目線に立って演じる」



写真9 「立って演じる」

3. 製作活動と発表について

①製作・リハーサル

立案計画から製作終了まで6コマを設定し、各自で必要な用具を準備し製作、リハーサルまでを行った。製作の目的や教材の内容、製作過程等についてはワークシートへ記入した。



写真10 「製作の様子①」



写真11 「製作の様子②」



写真12 「リハーサルの様子」

②発表

3回に分けて発表を行った。見学者は発表の感想をまとめた。発表については台詞や表現を覚えてくる者、本を見ながらたどどしく行う者と練習度合いの差が見られた。



写真13 「ペープサート実演」

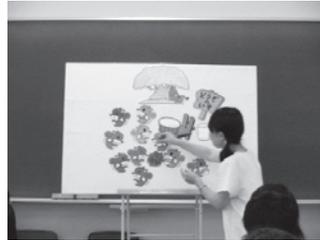


写真14 「パネルシアター実演」



写真15 「エプロンシアター実演」

4. ワークシートから読み取る学生の気づきと学びの傾向

3回分のワークシートを分析すると、学生は発表を見て次のような観点に着目していたことがわかった。すなわち、①発表力に関する点、②製作物に関する点、③子どもの目線に関する点、④保育者の視点に関する点、⑤臨機応変な対応に関する点、⑥アイデアの提示に関する点、⑦自身の課題に関する点、⑧一見学者としての感想である。以下、各項目について学生の記入例を提示しながら、どのような点に気づき学びとしているのか見ていきたい。

4-1 「発表力」に関する分析結果

「発表力」については、9項目に分類することができた。具体的な内容は、表2の通りである。

「①多様な表現法の導入」では、一つの作品の中にクイズや歌や多様なヒントを導入して展開していることへの気づきであり、2回目には1回目の倍の記入数が見られた。3回目になるとその数は1回目の半分ほどに減少し、その他の項目への気づきが増える結果となった。「②声・言葉・話し方」では、1回目から3回目において平均的な数値が並び、言葉や声の使い方に関する関心の高さが明らかになった。「③演出力」では、①と同様、2回目には倍以上の記入数となり、ジェスチャーや目線の位置など表現力への関心の高まりが見られた。「④表現のスムーズさ」では、3回共に平均的な数値であった。スムーズな展開は聞く側にとって心地よさがあること、物語展開に集中しその世界に入り込む要因となることへの気づきであった。「⑤台詞」については、1, 2回目は記入数「0」であったが、3回目には80記述と増大した。③表現力や④スムーズさと関連すると思われるが、台本を覚えていることにより、心地よいス

表2 発表力に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
①多様な表現法の導入 「歌に合わせていて」「クイズ形式になっていて」「ヒントもいろいろあって」	86	179	41
②声・言葉・話し方 「声が大きくて聞きやすい」「抑揚があって」「言葉と言葉の間がとても上手」	174	195	187
③演出力 「しっかりと前を見ようとしていて」「身振り手振りも入れている」	75	160	123
④表現のスムーズさ 「流れがスムーズで」「テンポ良く演じて」「スラスラと発表している」	43	37	41
⑤台詞 「台本もしっかり覚えていて」「長い話なのに全部覚えていて」	0	0	80
⑥導入部 「導入があってよかった」「一緒に片付けをしようって始まりが良かった」	0	35	7
⑦展開部 「歌に合わせたパネルシアターで色々な展開されていて良かった」	0	11	1
⑧終結部 「最後にちゃんと朝ご飯を食べようなどの呼びかけも食育につながって良い」	0	16	4
⑨本人らしさ 「とよちゃんらしさが出て見て面白かった」「りなちゃんらしい作品」	0	2	0

トリー展開と目と目が合う一体感のある演出が可能となることへの気づきであった。「⑥導入部」「⑦展開部」「⑧終結部」では、1回目は記入数「0」であったが、2回目には数値が上昇した。これらは保育教材の実演を通したねらいや意図への気づきと言える。「⑨本人らしさ」は少数であったが、個性が保育教材の演出に加わるにより魅力が増大することへの気づきにつながる可能性が示唆された。

4-2 「製作物」に関する分析結果

「製作物」については、12項目に分類することができた。具体的な内容は、表3の通りである。

「①仕掛けの導入」では、1・2回目に注目が集まっている。これまで目にしたことのない動きや製作の工夫に関心を向けていたことが伺えた。「②演目の内容」では、①と同様に1・2回目に関心が見られたが、3回目には約半数の数値となっており、内容そのものよりも内容に対する作品の精密さや工夫などに視点が広がっている様子が見られた。「③可愛らしさ」については、回を重ねるごとに数値が上昇している。「可愛い」という感性が評価の対象として際立っているのは初年次ゆえの特徴とも思われる。「④製作の精密さ」では、3回共に均等な数値と

「言語表現技術」における保育教材製作を通じた学びの広がり

表3 製作物に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
①仕掛けの導入 「花が取れるようになっていた」「帽子が被れるようになっていた」	74	81	53
②演目の内容 「内容がわかりやすく」「子どももよく知っている内容」「全部がオリジナルで」	68	88	41
③可愛らしさ 「くまさんの体がいろいろ動いているのがかわいい」「絵がとても可愛かった」	74	83	102
④製作の精密さ 「小物も細かくできて」「キャラクターが細かい部分まで凝っていた」	66	41	52
⑤季節感 「ブルという夏らしいテーマ」「梅雨の時期いいな」「季節感があった」	27	7	33
⑥色 「今にも雨が降りそうな雲の色が上手」「色がとても綺麗に塗られていた」	22	34	25
⑦制作の量 「たくさんキャラクターがいて」「エプロンに家がたくさんついていて」	18	16	17
⑧製作物の特質 「布をめくって家が出てくる所がエプロンならではの展開が面白かった」「エプロンが色んな舞台になっていて良かった」	0	35	7
⑨用いる教材での違い 「パネルシアターとは違う楽しみ方がある」「エプロンシアターだと感じが変わる」「エプロンの赤ずきんもいいな」	0	54	33
⑩サイズ 「人形が大きくて遠くからでもよく見える」「パネルの大きさも丁度良くて」	0	10	8
⑪絵の上手さ・詳細さ 「絵が一つ一つ丁寧に作られている」「イラストもわかりやすくて」	0	14	7
⑫素材への注目 「持つところもストローで作って良かった」「壁が立体で良かった」	0	3	0

なった。発表時に作品演出の全体像のみならず、細部にまで関心を寄せて見ていることが伺えた。「⑤季節感」では、回によって季節的なテーマ性のある作品かどうかにより数値にばらつきが生じた。しかし、保育の取り組みとして季節を考慮に入れた保育実践は重要であり、今後の保育実習等にも生かすことのできる気づきにつながった。「⑥色」「⑪絵の上手さ・詳細さ」では、テーマや内容に沿った色使いや丁寧な描き方、色の塗り方などに気づいていた。製作過程において色むらに対する質問も多くあり、様々な素材を用いて色を塗り分けることの重要性につながったと思われる。「⑦制作の量」では、3回共に均等な数値であり、作品のパーツを一つひとつ丁寧に作り上げていることに気づいていた。「⑧製作物の特質」は、1回目に演じ

られた作品と比較することによって教材の特性が異なり、教材の特質が持ち味として生かされることへの気づきである。教材ならではの演出に魅力を見出したと言える。「⑨用いる教材の違い」では、⑧と同様、前回の演出内容と比較することにより、同じ作品でも演出者によって個性が生じ、多様な見方ができることへの気づきである。自らの演出力を磨く重要性に結びつく重要な視点である。「⑩サイズ」では、大きさによって見やすくなることに気づいており、つまり、演者と観客との距離感をつかむ学びとなっていた。「⑫素材への注目」では、保育教材に用いる材料や素材をうまく組み合わせて立体的で動きのある作品へと作り上げていたことへの気づきとなり、応用発展的な演出方法へつながる視点となった。

4-3 「子どもの目線」に関する分析結果

「子どもの目線」については、4項目に分類することができた。具体的な内容は、表4の通りである。

表4 子どもの目線に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
①子どもの目線 「子どもたちがお話の世界に入り込みやすい」「クイズなので子どもが喜ぶ」	40	73	51
②教材を通した子どもの学び 「ゴミの分別を楽しくみんなで考えられる」「手洗いうがいもできるようになる」「助け合う大切さがわかる」	40	32	75
③子どもの好きなテーマ 「みんなが大好きアンパンマン」「子ども達に大人気のキャラクター」	18	19	11
④子どもと共に行う意味 「歌と合わせていたので子どもたちと一緒に歌える」「参加できて良い」	0	19	35

「①子どもの目線」では、子どもの前で表現する場面を想像し、子どもが何に喜び、何に楽しみを見出すかなど考えていたことが明らかとなった。「②教材を通した子どもの学び」では、3回目において数値が急増しており、教材を通した保育の意図に気づき始めたことが推察された。「③子どもの好きなテーマ」では、教材の製作過程において子どもの好きなキャラクターやストーリーを選び、子どもが興味関心を抱くことができるように配慮していることが伺えた。「④子どもと共に行う意味」は、1回目に見られなかった記述内容で、教材を演出する際に演者が一方的に演じるのではなく、子どもと一体感を持ちながら共に作り上げていく重要性への気づきとなった。

4-4 「保育者の視点」に関する分析結果

「保育者の視点」については、2項目に分類することができた。具体的な内容は、表5の通りである。

表5 保育者の視点に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
①保育（者）としての意図 「感謝の気持ちを伝えることの大切さを教えられる」「教え方を教えられる」	40	24	112
②問いかけ 「これは誰と問いかけているところがとっても良い」「優しく問いかけていて」	0	0	49

本項目については、回を重ねるごとに顕著なまでの差が生じた項目であった。「①保育（者）としての意図」では、1回目と比べ3回目は3倍の数値となった。本項目が意図することは、教材を演じるのは子どもに何かを伝えるためであることへの気づきである。これは、実習において「ねらい」を立てて保育実践を行う意識へとつなぐことのできる気づきと言える。「②問いかけ」では、3回目のみに現れた数値であり、台詞としての表現のみならず、臨機応変に問いかけたり、話を展開させたり、事例を用いたり、演出を豊かにしていくための方法への気づきとなった。

4-5 「対応のあり方」に関する分析結果

「対応のあり方」については、1項目であった。具体的な内容は、表6の通りである。

表6 対応のあり方に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
臨機応変な対応 「なかなかパンダが出せなくて『太っちゃったみたいだね』と言葉をかけていてすごいと思った」	0	13	9

「対応のあり方」については、予想外の状況に対する臨機応変な対応の必要性についての気づきであった。実際に教材を演じる中で、手順を間違えたりうまく貼れなかったりとアクシデントは付きものである。その際にストーリーや展開に影響することなく、言葉やジェスチャーを用いて演じ続けるという柔軟性や瞬発性が求められる。臨機応変な対応を見て、演じる上での応用的な実践の必要性を実感したことが伺えた。

4-6 「アイデアの提示」に関する分析結果

「アイデアの提示」については、1項目であった。具体的な内容は、表7の通りである。

表7 アイデアの提示に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
アイデアの提示 「ヒントの出し方を変えるとまた違う感じになる」「髪の毛を縛るといいかな」	0	26	25

本項目は、2回目から現れたもので、一見学者としての客観的な立場や保育者の視点からアドバイスを記したものである。このようにアイデアを提示し共有するという受容的な人間関係を構築していくことは、チームワークが求められる保育職にとって重要な観点であると言える。

4-7 「自身の課題」に関する分析結果

「自身の課題」については、1項目であった。具体的な内容は、表8の通りである。

表8 自身の課題に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
学びの意欲 「この歌を覚えたいと思いました」「自分も作ってみたいと思った」	5	7	13

学生は、他者の作品を見ることにより、多種多様な教材を知ることにつながり、興味関心のあった作品については自らも作製してみようとする意欲となって現れていた。今後の保育・教育実習において実践していくためには、教材の引き出しを多く持ち、状況や環境に合わせて選別していく力が求められる。そのためには、他者の発表を見るという経験の積み重ねが重要と考えられる。

4-8 「一見学者の立場」に関する分析結果

「一見学者の立場」については、1項目であった。具体的な内容は、表9の通りである。

表9 一見学者の立場に関する気づき

項目・記入例	1回目	2回目	3回目
感想 「次は何色の何が出るかワクワクした」「夢中になっちゃいました」	19	34	30

「言語表現技術」における保育教材製作を通した学びの広がり

一見学者として純粋な気持ちで発表を見学し、ストーリー展開の中でワクワクしたり、緊張したり、夢中になったりと素直な感情を表出していた。保育者が教材研究をする中で、ストーリーの魅力に浸り、ストーリーを通して伝えたいことは何か、子どもは何に関心が向くかなど、教材の魅力を分析研究していくことは重要な視点である。子どもの視点、保育者の視点に加え、自分自身の率直な気持ちに寄り添うことのできる感性も重要であろう。

5. 考察

以上、8つの観点に沿って、教材発表を通した学生の気づきや学びを分析してきた。学生は、発表回を重ねるごとに新たな発見をし、一見学者としてだけではなく、子どもの視点や保育者の視点で教材の意味を考えるようになっていた。また、注目すべき点は、表10のように発表回を重ねるごとに発表者へのアドバイスを記していた点である。

以上のように、発表を行う中で学生は他者視点に立ち、表現に関する課題を多角的に探って

表10 アドバイスの具体的内容

アドバイス項目	具体的記入例
声・言葉	○子どもが世界に入り込めるようにゆっくり話していいもう少し抑揚があったらいい ○自信を持って大きな声でできるようになればもっといい ○声に表情をつけて語りかけるようにできたらいい
演出力	○後ろを向いていたのもっと前を見て発表したらいい ○みんなの方をもう少し見るといい ○背中を向けることが多かったのでたくさん練習して自信をつけていけばもっといい ○声が凄く可愛いので役に入り込んで演じられたらもっといい
台詞	○もう少し内容を覚えてすらすら読めると良かった ○台本を覚えて子ども達の反応を見ながら語れるようになるともっといい ○間があったので話を覚えておくともっといい
スムーズさ	○パネルに貼る順番に並べておく方がスムーズに話が進む ○動物を取るときにもう少しスムーズになるとよりよくなる ○途中ひっかかっていたのでそれが無いともっと良かった
導入	○導入で「みんなは迷子になったことあるかな？」などと聞くともっといい ○導入でもっと子どもに「どんなパンが好き？」など問いかけるといい
問いかけ	○ヒントがたくさんあるともっといい ○もうちょっと子ども達に語りかけるようにしたら良さそう
精密さ	○部品がちっちゃくてよく見えなかったのが残念 ○色が薄かったので色鉛筆より絵の具とかの方がいい
子どもの視点	○話の展開が早くどんどん進んでしまったので、幼児は理解するのが難しいと思った

近 藤 千 草

いる様子が明らかになった。このように、発表回を重ねることは、前者との比較が可能となり、自らの体験と他者の体験とをすり合わせ、自らの表現を振り返ることによって省察が深まる構造であったと言える。この結果から、初年次における本体験を次年次以降においても発展的につなげていくように、基礎理論の構築と保育実践とを螺旋的な構造において組み立てていく重要性が示唆されたと言える。

平成 26 年度も同様の発表会を行ったが、本稿での結果を踏まえ、ワークシートの記入方式をより詳細な項目へ変更すると共に、学生には「台本を覚えてくること」、「教材のねらいを考えること」を課題とした上で発表に臨ませた。また、製作した教材は、夏期休暇中に実施される附属保育園体験実習（2 日間・同クラス）の中で実践し、「実践報告書」を提出することも課した。平成 26 年度の実践結果を再度分析し、豊かな保育表現につなげる方法として有効であるか検討していくことを今後の課題としたい。

参考資料

保育士養成課程等検討会，2010，「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」，p.7

使用資料

第 1 回目発表ワークシート 平成 25 年 7 月 03 日 41 枚回収 /44 名
第 2 回目発表ワークシート 平成 25 年 7 月 10 日 43 枚回収 /44 名
第 3 回目発表ワークシート 平成 25 年 7 月 17 日 44 枚回収 /44 名

付 記

本稿は、全国保育士養成協議会第 53 回大会において発表した内容に加筆修正を加えたものである。

謝 辞

言語表現技術において作製した保育教材を体験実習において実践させて頂くことを快くお引き受け下さいました川村学園女子大学附属保育園の園長先生並びに諸先生方に感謝申し上げます。